

# 賀川豊彦の畏友・村島帰之（その七）

第84回～第95回

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之（84）－村島「アメリカ紀行」（4）

「雲の柱」昭和6年12月号（第10巻第12号）への寄稿の続きです。

### アメリカ紀行（4）

#### カナダからアメリカに入る

トロントーニューヨークークリブランド

村島帰之

（前承）

三十日

急に出発する事になって、朝中を忙しく準備に過す。

午餐はポーランド人と向ひ合って、村島の意味などを訊くので話す。午後二時、正則中學時代の同窓で二十五年振で會った当地在住の飯島秀雄君の自動車で駅まで送って貰ふ。

ベーツ博士、ノーマン氏、前川氏が送ってくれられる。途中、ハミルトンで乗替へて二十五人乗のナイヤガラ行のバスに乗る。

#### ナイヤガラ

バスはやがてアメリカとカナダの国境に達した。大きな橋を越えると、もうアメリカの領土だ。

Stop U.S. Customs and Immigration の文字が大書されてゐる。移民局と税関だ。中央の通路が鎖で閉されて自動車にその右側を、乗合自動車は左側を一々検問を受けてから通るのだが、自動車の検問を受ける箇所には、特に地面に電燈をつけて、車台の下に酒類などを潜めてゐるものを観破する仕掛けになってゐる。

私たちのバスには二人のオフィサーが乗込んで来た。税関吏の方は私たちの荷物の外観を見た丈でその儘パスしてくれたが、移民官は今井さんの旅券について調べるといふので二、三十分間、オフィスで訊問があったが、間もなく帰って来た。今井さんは學生として米國に来てゐたが既に卒業

してゐるので、再び米國へ入る必要はないといふのださうな。しかし萬事諒解して、おまけに入國税まで免除してくれる。

ナイヤガラは嘗て、賀川先生がこの附近のある富豪の家にボーイをしてゐた事があつて、地理に詳しい。

駅でタクシーの世話人が親切さうに「君の時計は間違つてゐないか」などと言葉を掛けて、さて「ナイヤガラへ行くならタクシーにのれ」といふ。「いくらだ」と訊くと「三人で九弗」といふ。日本人は金を持つてゐると思つてゐるからだ。箆棒奴、そんな高いのに乗れるもんかと許り、賀川先生が、とつと先へ立つて行かれる。そして町へ出たところで客待のカーが誘ふので、いくらだといふと、勿驚「二十五仙」だといふ。まるで桁違ひだ。

で、それに乗ると、やがて、ナイヤガラ近くになつて、「ここまでで二十五仙だが、ナイヤガラをぶらつと廻つて一弗にしておくがどうだネ」

と来た。この先生、独逸のヒンデンプルグに似た風貌を持つてゐるが、外交的手腕もなかなかあなどれない。

でいふ儘に行く。

公園の並木といったやうなところを過ぎると、忽ち大川だ。いふまでもなく、ナイヤガラの水の流れるところだ。

急湍が、白い泡を湧立たせ乍ら走るやうに流れてゐる。

少し行くと、自動車は止つた。下りると、そこはアメリカ側のナイヤガラ瀑布だ。瀑布と並んで観瀑台が作られてあるので、そこから瞰下すと自分の身体も一緒に瀧壺におちさうな心持がする。

巾何十丈といふ瀧の水が、まるで、硝子で作つたもののやうに一定の容積を持続し落ちてゐる。そして瀧壺のあたりは一面のしぶきでぼかされてゐる。

瞰下すと、下の方で、レインコートを着て歩いてゐる人の姿が見える。瀧の裏を行つてゐるのだ。

對岸はカナダである。そして片側にはカナダのナイヤガラが落ちてゐる。

カナダのナイヤガラは馬蹄形をなしつつ落ちてゐる。何の事はない、分の厚いカップが半分破れたやうな恰好だ。

運転手に訊くと、此の瀧に落ちて死んだ者も相当あつて、その内には日本人もゐたといふ。また或る米人は、盥のやうなものでこの瀧壺を乗切らうとして死んだともいふ。

ついでに瀧を下から見上げるために、エレベーターで下へ降りて見る。

これは壮観だ。瀧の上部の流れから瀧となって落ちるところの水が青く透きとほってエメラルドのやうに光ってゐる。大きな宝石のつらゝだ。あくまでも濁りを知らぬ處女宝石だ。

上から落ちて来たらしい巖石に腰かけて、いつまでも壮観に見とれる。

瀧の反対側を見ると、カナダ側にはホテルらしい建物や、発電所らしいものが見え、アメリカ側にも高い煙突などが見える。

自然と近代風景のカクテル。

汽車の出るまでに間があるので、私たちは町へ出て食事をとる。

ナイヤガラは五十年来、嘗てない不景気だといふ。不況のため、見物どころではないからだらう。

アメリカ、インディアンの玩具を買ふ。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(85) — 村島「アメリカ紀行」(5)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)に寄稿の続きです。

### アメリカ紀行 (5)

カナダからアメリカに入る

トロント—ニューヨーク—クリブランド

村島帰之

(前承)

ニューヨーク

八月一日

午前七時、ニューヨーク着。巾の狭いプラットホームが気になる。しかし日本のやうに見送人が殺倒しないからこれでいゝんだらう。

プラットを出ると、大原武夫兄がまっ先に僕の手を握ってくれる。日本にゐる時よりも元気相な

顔だ。

「よく来たね。君はもう来ないんだらうと思ってゐたよ」

と、しみじみといふ。なつかしさと信頼とで胸が一杯だ。

賀川先生を出迎への教会関係の人々と一緒にニューヨーク日本人教会へ行く。

「七時着といふんだから今日は六時に起きたよ。ニューヨークへ来てこんなに早く起きるのは初めてだ」

「それはすまなかったね」

「いやすまなかないよ。とても素晴らしい発見をしたからなんだ。といふのは、六時過にニューヨークの市中に出て見ると、店も未だ閉ってゐるし、人通りさへ稀なんだ。そこで、ニューヨークは、すべて僕同様寝坊な人種だといふ事を発見したのさ」

大原兄は面白さうに笑ふ。

私たちは出迎の牧師さんたちと一緒に食事を済ませてから別れ別れになった。今井さんは自分のアパートへ、二人の牧師は自分の教会へ。そして賀川、小川、大原、村島の四人がエルで日本財務局出張所へ行く事になった。

エルといふのは高架鉄道の略称だ。高架の下は地面電車が走ってゐる。そしてその下はまた地下鉄道が走ってゐるのだ。五仙のニッケルを改札の金人の穴に入れると、入り口が廻転して一人宛這入れるやうになってゐることは東京の地下鉄と同じだ。

プラットへ出るとそこにある柱のことごとくに、チョコレート、ピーナッツ、チューインガムの自働販賣器が取りつけてあり、また後の方には自動計量器が置いてある。

大きな音を立てゝエルが来た。入口に近い處には縦縞のやうな鉄製の靴ぬぐひ(?)がひいてある。日本だったら、早速、下駄をひっかけてころぶところだ。

多くの外人――否、自分たちを除いてはみな外人だ――がある。みんな此方を見てゐるやうだ。インデアンだけはわれ等にまで遠慮してゐるやうに見える。

概して日本に比べて婦人の多いのはどうしたものか。

後から知った事だが、朝夕のラッシュ・アワーを除いては、街頭や乗物は女の世界だ。男はオフィスや工場で働いてゐて、女は家にキーをかけて買物に出かけて来る。外出率はとても日本の女の比ではないらしい。それは御用聞きの少いのと、キー一つで外出が容易に出来る関係だらう。

エルの進行につれて、スカイラインが、指数表の線のやうに引かれて行く。

「あの高いのがエンパイアビルだよ。今年の五月に完成したので、世界一の建物さ」と大原君が説明してくれる。嶄然頭角を抜くといふ言葉が之程当てはまるどころはあるまいと思ふ。

しかし、その頭角を抜かれてゐるといふ小さい建物が、いづれも五十階、百階の大廈高桜なのだ。パノラマだ。いや、おもちゃだ。或は蟻り巣かも知れない。

此の頃、日本のキャンデー・ストアで賣つてゐる入れませ菓子の容器で正方形の穴を無数に穿つたのがあるが、スカイスクレパーは小児がその容器を無数に積重ねて遊んでゐるんだと思つた。

神さまの仕業なら、モット芸術的だらう。これは丈の低い文明人が立体的に伸び上れぬ腹癒せにする積木玩具なのだらう。

エルを税関の前で下りて、名にし負ふブロードウェーを上る。

高層建築は両側に聳え立って、空もわづかに長方形に区切られて見えるだけだ。

「まるで、崖の下に歩いてゐるやうだ」と私がいへば、賀川氏は「いや、谷の底を歩いてゐるやうだ」といはれる。

これでは通風も換気も採光も遮られて、焦然地獄を現出するのも理の当然だ。

都会人は、自身、自殺してゐるやうなものだ。都會は墓場だとルッソーがいったが、この高層建築はその墓碑そのものなのだらう。

廣い歩道を、よごれた白靴で私はフワフワした気持で歩いて行く。

「高松宮様のやうな國賓が見えると、この道を市廳まで行かれるので両側は歓迎者で一杯になるんだ」

と大原兄が説明してくれる。

なるほど、激しい人通りだ。散歩者なんかの影は全く見えないで、用事を持った人が急ぎ足で往き會ふ許りだ。

やがて、とあるビルディングの何階かにある財務官のオフィスの人となる。

財務官と賀川先生の間、独逸の金融恐慌についての對話が交される。

ついでに、隣りの正金銀行支店へ行つて、園田支店長に會見される。私はその間に正金から貳百圓の金を信用状から引出す。弗に換算して九十八弗三十仙（四九弗一五仙換）だ。

これより先、財務官出張所の所員が、

「村島さんといはれるのはあなたですか」

といふ。「左様です」といふと、

「今のさつき、木村さんといふ方から電話であなたが見えたら國米ホテルへかけてくれといふ事

でした」

といふ。木村毅氏かな？

私のニューヨークへ来てゐるといふ事を知つてゐるさへ不思議なのに、さらに私の行先まで突止めるとは。

私は大原兄を煩して正金支店長の卓上電話をかりて電話をかけて貰ふ。いふまでもなく交換手なしの電話器だ。局の名のかしら字、二字とその局を表はす数字を先に出して、それから番号を出すのだ。

「ハロー」と呼出すとこえも、一寸、耳に新しい。果して木村毅氏だった。電線を傳つて聞えて来る氏の太いベースの声のなつかしさよ。

「二時半からユニオン・スケアーで共産党のデモンストレーションがあるからいらっしゃいな」と言ふ。ユニオン・スケアーは、種々の社会運動のデモの行はれる處ださうだ。

兎に角、行く事にする。が、その前に、世界一のエンパイア・ビルへ上つて見やうといふので、三三丁目、五アベニュー、ウェストサイドへタクシーを走らせる。

タクシーは黄色のと、緑のとがあるがいずれも初めの四分の一哩が拾五銭、それから四分の一哩を増す毎に五仙づつ殖えて行くのだ。メーターの傍らに、車台の番号と、運転手の寫真が貼つてあるのも変つてゐる。車の表側の腹に、料金を大書してあるのは、矢張りアメリカらしい。

やがて、エンパイア・ステートビルへ来た。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(86) — 村島「アメリカ紀行」(6)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)に寄稿のつづきです。

### アメリカ紀行 (6)

#### カナダからアメリカに入る

#### トロント—ニューヨーク—クリブランド

村島帰之

(前承)

## 「世界」の高層建築

入場料を払ってエレベーターを上る。エレベーターを乗替る事三度。百二階に達する。高度千二百五十フィート。世界一の高さだ。

ワンダフル、無数に聳立った地上の建物は、巨人の前に手を伸ばしてゐる幼見のやうにしか見えない。

「人間の墓場だね」  
と賀川先生にいはれる。

全くだ。

あの小さな建物の、その一つ一つの窓の中には、人間といふ蟲が巢喰ふてゐるのだ。

偉大なる人間蟲の巢の集團だ。

それにしても、人間蟲の果の多種多様なることよ。或ものは、のっぺらぼうに四角形を幾何学的に唯無数に積重ねただけで居り、或ものは外側を梯形に積重ねてゐる。また或ものは頂上を槍のやうに尖がらせ、或ものはドームを形どつてゐる。

クライスラーの如きはモリ錐のやうな螺線を描いて空を突っさすやうに立ってゐる。中には全身を黒で染めて、尖端だけを金で彩つた佛壇のやうなのさへある。それがいづれも五十階内外の高さだ。そのビルディングの間を縫ふて走る電車は、蠅ほどにしか見えない。

その蠅を追ひ越して次から次へと走る自動車は足の早い蟻だ。

人間は余りにも小さくて、肉限では見えない。人間は顕微鏡をかけねば存在の判らない微生物だ。

欄によって四辺を見廻すと、西はハドソンリバー、東はイーストリバーによって、三角州の如く横たはつたニューヨーク市街は、その人間の巢でギッシリと詰つて、殆ど足を容るゝ余地がないほどだ。北方にわづかに残された線地は中央公園だといふ。

実際、緑がない。見渡すところ、砂漠の一隅に積上げられた蟻の巢の集團だ。これが大都市といふものなのだらうか。無数のその巢が、形状よりも、色彩よりもまづその高度を競争してゐるのだ。

人の目に立つためには、何よりもまづ、高いことが必要なのだ。それば必ずしも光線を余計に採る必要から来たものでもない。

高飛び競争だ。

より高く飛上らうとして競ってゐるのだ。

人見絹枝さんの心理だ。

それにしてもニューヨークのオリンピックレコードの、目まぐるしいまでに破られ、破られして行くことよ。

エンパイアーから東北方、わづか離れた處に錫色の尖塔を頂いたクライスラー・ビルが陽に光って立ってゐる。地上千四十六フィート、今春まではエッフェル塔を凌ぐ事六十フィート、世界一を誇つてゐた彼も、今は、エンパイヤーの足下にひれ伏した形だ。

況んやウールオースビルの如きは半分のせいしかない。

ちっと耳を澄すと大きなダイナモの唸つてゐるやうな響きがする。それが全市響なのだ。エルの音、カーの音、それ等が一となつて遥か下から聞えて来るのだ。

蟻のやうな一つ一つの電車で、一つ一つの音は聞かれずに、全市の音が混濁して一つの音響として聞えるのだ。

都會の音！

機械文明の響！

生存競争の喚き、生活難の叫び、

それがこのゴーツといふ佻しく、やるせない寂しい一つの音として聞えるのだ。

世界の人間がニューヨーク、ニューヨークといつて憧れるが、結局、ニューヨークの文化は、このゴーツといふ一つの音響にしか過ぎないのだ。

或る盲人が、ニューヨークの印象は？ と訊かれて「機械の磨れ音、ガソリンの匂い」と答へたさうだが、確かにさうだと思ふ。

ガソリンの匂ひは、われ等エトランゼの胸を悪くする。アスファルトの路何十尺四方かは空気よりもガソリンの烟の量の方が多いに違ひない。その汚濁された空気を吸ふて生きてゐる人を、都會の住民といひ、文明人といふ。

機械の磨れ合ふ音を、文明の音といふ。小鳥の囀りや、流れのせせらぎは非文明の音だ。この汚濁された空気を吸ひ、機械の摩擦音を聞かねば文明人とはいはれないのだとすれば、私は文明人であるよりも、田舎者であることを選ぶ。



何だか文明とか文化とかいふものが、つまらなく感じて来た。

ニューヨークがだんだん小さく、くだらないものになって来た。

高い建物が何の権威に値するんだ。高いのが尊いのなら、山に如くものはなからう。

建物の美か、それだって、今のところ、金さへあれば、誰にだって出来る事だ。

それに引き代えてハドソンの流れの悠長さはどうだ。

遙か南方のアップーベアの海の悠久さはどうだ。

「自由の女神の塔はあそこだ」と指さされた處には、ボツンと点として見えるだけだった。

ニューヨークの建物は崩れる時があっても、女神の象徴する自由の精神は永久に残るだらう。

建物に永遠の生命はないが、精神には、海には永遠の生命がある。

下りる事にして、改めて、もう一度、私たちは、そこをぐるぐると一周してニューヨークを見直した。

美しい橋が見える。ハドソンの上流には、今現に工事中の大きな橋が見える。今は一つも橋がなく、カーも人も地下か、若くは船によってゐるのだ。これはアメリカ人の好きな世界一の長い橋だといふ。

八十六階まで下りると、また展望台になってゐる。そこは頂上と違って、ガラス張ではなくオープンだ。

「日本人なら、ここから飛降りて、飛降り自殺のレコードを作るだらう」と私がいふと、

「なぜ、アメリカ人はこのレコードを作らうとせぬのか不思議だ」と小川先生が呼応する。

仰いで見ると、八十六階から上はアルミニウムとガラスのモンタージュだ。

尖端にツェツベリン飛行船を繋ぐ装置になってゐるのか。

この建築に当っては、松井とかいふ日本人の技師が最重要な役割についたといふ。ビルヂングには多くのオフィスがあるが、日本では三井が七階全部を借切つてゐる。

再びエレベーターで地上に降りた時、大原兄は「何だか耳が変だよ」といふ。気圧の変化に因るのだらうが、私は鼓膜の破れてゐるせいさうは感じなかった。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(87)―村島「アメリカ紀行」(7)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

### アメリカ紀行(7)

カナダからアメリカに入る

トロント―ニューヨーク―クリブランド

村島帰之

(前承)

#### 共産党の示威運動

此度は地上電車(サーフェース)でユニオン・スクエアへ出る。

電車に乗ると車掌が、箱を持って来る。そこへ五銭を入れれば、音がする。それで乗車賃を支拂った訳だ。

凡てが機械仕掛だ。ごまなしの出来ぬ仕掛だ。

ユニオン・スクエアにつく。

中央に芝生の高台のある廣場だ。

その一隅に赤旗を立てて演説をしてゐる一群がある。いふまでもなくコンミニストの一群だ。

「ストライキを支持せよ。」「ボスどもを蠅の如く追拂へ。」「資本主義と戦へ。」「失業者を救へ」などのスローガンを書いた立札のポスターが各人の手に支へられてゐる。中には漫画のものもあった。

中央では大きなメガホンによって、演説が四方に伝えられてゐる。拍手が湧く。日本のと同じ雰圍気だ。警官はと見ると、ニコニコし乍ら、通行者を整理してゐる。立止る者があると「歩け歩け」といふ丈けだ。

スクエアを外れると、そこには騎馬巡査の姿も見たが、それも人形のやうな存在にしか過ぎなかった。

聞けばニューヨーク附近に大きな鉱山ストライキがある場合とて、激化を怖れてわざと警戒をゆるめてゐるのださうな。

日本でデモを激化させるのは、官憲の警戒だと思った。

誰がデモを激化させるか？

アメリカは善い回答を与えてくれる。

またタクシーで四十二丁のニュースビルへ行って、大毎のオフィスに落付く。

ニュースビルはニューヨークヘラルド紙を中心に、UP（聯合通信）やその他世界各国の関係新聞関係のオフィスのあるところだ。一階の読者相談部は、取扱件数一日二千件を越えるといふ。尤も、お化粧の事などが多いのださうだが。

大毎はその十六階にオフィスを持ってゐて、大原武夫の外に、助手の高田さんがゐる。

久し振りで大阪毎日を見る。しかし私の出発した七月十日以後のものは余り来てゐない。自分の打った電報がどの程度の大きさに紙面にのつてゐるのか、半月以上も判らないなんて、特派員はたよりない気がするだらうと思った。

「村島さん、自分の處へ帰って来たやうな心持でせう」

と小川氏がいふ。

その言葉のやうに落ち着いたといふのか。ソファーに凭れてついウトウトとする。

大きい声に驚かされて目を覚ますと、木村毅氏が、時事の長谷川進一氏を同伴で来訪したのだ。メキシコへ行って熱帯病に罹った話。ロシアへ入國の出来ない話などをする。

大原兄の「オフィスを出て、タクシーで紐育教会に立寄り、荷物を持って、今井さんのアパートに向ふ。先生はインターナショナルハウスに寄られる。

## アパート生活

私の宿はニューヨークへ着くまで全く予定されてゐなかつた。最初に荷物を下したニューヨーク教会で泊めて貰へるのかと思つたが、「あなたの宿は大原君が世話するんでせう」といはれた牧師の最初の言葉と、そしてあとで、たとへ冗談ではあつたが「ここは村島君には上等すぎる——とSさんがいつてゐるよ」と賀川先生がいはれたのに気を悪くして、私は他の宿をとる決心をした。

木村毅氏は自分の泊つてゐる國米ホテルへ来ないかといつてくれたが、氏は一兩日中に出発して了ふので、今井さんが自分のアパートの一室があいてゐるからと勧められるまま、その方へ行くことにした。

旅に出ると、神経が妙にとがって、気にしなくてもいいやうな事を気にするものだ。

私は自分の神経質と短気とを自ら恥る。今夜はクエーカーの信者某氏が賀川先生を招待してゐるが、個人的招待なので私は遠慮する。アパートへゆく途中で、此の森岡君（法政大學野球チームに随件して来た人）に會ひ、一緒に今井さんのところへ行く。

百十六丁目、モーニングサイドアペニュー六五、武藤さん方だ。

今井さんは待ってみてくれられたと見えて、大悦びで迎へて下さる。私のために借りておいて下さったのは、客間附の二部屋だ。前は公園の一部になってゐて、全面の緑。そしてその上の方に、丘上に聳立ったコロンビア大學の一部の建物が見える。

ソファーも二つある。蓄音器まである。

大原、森岡両氏が去ってから、今井さんの隣室に泊って居られる大村さんといふ慈恵会出身の婦人の御馳走を頂く事となる。

打寛いだ心持で、今井、木村両婦人と日本の話をしながら、日本食を頂く。アパートに東向の光線の少ししか這入らぬ部屋が一日一弗。私の部屋は日当たりのいい二間なので一弗五十仙。安い宿賃だ。クリーブランドのホテルなどに、一弗もとられたのだから。

入浴後、臥床、少しの間表の自動車の音が気になったが、間もなく眠りに落ちた。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(88) — 村島「アメリカ紀行」(8)

「雲の柱」昭和6年12月号（第10巻第12号）に寄稿の続きです。

### アメリカ紀行（8）

#### カナダからアメリカに入る

#### トロント—ニューヨーク—クリーブランド

村島帰之

(前承)

二 目

小川先生から電話がかゝって来たので、あわてて起きる。もう十時だ。よく寝たものだと思ふ。「午後二時から一緒にダウンタウンの方へ行かう、此方から迎へに行くから」との事なのでその儘

起きた。

今井さんに連れられて、近郊のカフェーへ行って、朝食をすます。果物と、トーストとフライエッグと牛乳とで一人前三十五仙は安い。

アメリカは喰べ方においては、いくらでも安くあがるものだといふ。レストランへ行けば、どんな事をして一人一食一弗以上は払はねばならね上に、一割のチップだ。

それがカフェーへ行けば半分ですむ。

チップもそれに従って少い。さらに、カフェテリアといって、自分で好きなものを皿に盛って、自分勝手に運んで来る家では、定食でなく、好きなものだけ喰べられて経済な上にチップも要らない。

なほカフェーでも、スタンド式の處は、止り木のやうな處で喰べるので、チップは要らない。これが最も簡単だ。

けふは日曜なので外の店は閉じてゐるが、カフェーと新聞店は開いてゐる。

### ホスヂック博士の説教

ニューヨークの美しい、そして大きい教會である百二十二丁目のリバーサイド教會へ行く。白いゴチック風壯麗の建物だ。今日は米國一の名説教家ホスヂック博士の説教があるといふので、押すな押すなだ。といつても、混雑は全くない。多くの男女が一行にならんで静々と入場する。

警官のやうな風をした白警團員が入口を警戒してゐる。

私達は少しおそく行つたので二階へ招かれた。で、階下は知ることが出来なかつたが、二階だけでも二百人は入れる。

會衆は概して女が多い。流石、キリスト教信者だけに、つゝましやかな女性ばかりだが、それでも、二の腕迄露出して、アメリカ人特有の腋臭が香ふので、しめ切られた場所ではむせかへるやうだ。

實際、女の肌まる出しには驚く。電車の吊皮につかまってゐる女性などは、腋下の毛を露出して恬然としてゐるのだから。

スカートは、日本の洋装美人のやうに短くしてゐるものは殆んどない。スカートは長くなつてゐる。日本は数年前のアメリカの流行をその儘にしてゐるのだ。

只腕の露出はアメリカの方がうわ手だ。それなのに、むし暑い夏にも、上衣一つ取る事もレディーの前では憚らねばならねといふアメリカの男はあわれた。

私はよくも日本に生れて来た事と思ふ。

それはさておき、教会堂の観察に立ち帰って、ゴシック特有の椎の実のやうに上の尖った中桂門を通して遙か遠くの教壇のあたりが見える。我等の上には王冠のやうなシャンデリヤが垂れてゐる。前方の両側はゴシック風の四本づつの圓柱に全建物がガッチリと支えられてゐるのが見え、その間に虹を細く打ち砕いたやうなステンドグラスが、眩ゆく見える。

定刻が来て白衣のガウンを着た聖歌隊が入場し、合唱などがあって、献金だ。献金の前金制度もアメリカ式といふのか。

「學生は十仙、その他は二十五仙、献金の相場です」と今井さんに教えられて、廻って来た銀の皿の上にコーターを入れる。献金の皿の廻し方の早い事、米人のスピード・アップはそこにも見られる。

それから又讚美歌の合唱などがあって、いよいよホスデック博士が、向って左側の壁際にバルコニーのやうに突き出た演壇に立つ。

頭上には、圓錐形の金色の圓蓋が下つてゐる。博士の演説は発音が明瞭の上に、スピードも早くはなく、よい程度のジェスチャーを入れてやられる。判事のやうなガウン、顔を動かす度に光る眼鏡。

演説は悲しいかな、語學の素養の乏しい私には全体としては聞き取れなかった。今井さんの助け船によって、漸く知り得た所は「可能性を信じ得る人程、偉大なのだ。そこに力が加はる」といふやうな話だった。後から小川先生に聞けば、之はホ博士の十八番の説教で小川先生も空で暗誦してゐるといふ。

教会は第一金をかけてゐることをしみじみ感じさせられる。此の教會などは、到底、百萬弗以下では出来ないに違ひない。

ニューヨーク市街を歩いて、教會の多いのに驚く。何ストリートと呼ばれる大通りには、十ブロックとは行かね中に、必ず一つの教会が、街角にそびえ立ってゐるのを発見する。それが、いづれも、日本の教会のやうなケチ臭いのではなく、ゴシックか何かの立派なものだ。私は幾度立ち止つて、天を指す尖塔を見上げたことか。

公園に近い所の丘上に、聳ゆる大きなドームをかぶった天主教の公堂は、三十年とかの継続事業で建築を続けてゐるとかで、今で立派な会堂が何處迄大きく立派になるのかと驚かされる。

ニューヨークの摩天楼の中で芸術的なものを選んで行くとしたら、恐らくは大部分は教会堂が選ばれるに違ひなからう。金の掛つてゐるのは、只に、會堂の建築のみではない。例へば、献金を入れる皿丈けでも安いものぢやなからう。之で一週に一時間位しか使用しないで、後はしめ切つて置くなどとは全く勿体ない気がする。

資本主義下のアメリカの宗教！

ホ博士の説教にも弗の響きをするやうな気がしてならなかった。

教会を出てサンデー・ペーパーを買ふ。五仙づつだが、二部買ふと、脇に抱えて帰るのに重みを感じた程だ。流行、社交、運動、新刊紹介などの各紙面はただ、上つ面を見ただけだ。付録の読み物雑誌、漫画も閑人でないと読み切れない。

アメリカの食事と同じく、新聞も又あまりに量が多すぎて、箸を取る前に食傷して了ふ。だが、アメリカの新聞も、此の頃の不景気では、すっかり広告収入が減つて弱つてゐるやうだ。サンデーイヴニングポストが広告減で如何に頁のやせた事よ。広告収入をあてにして、原價を切つてウント安く新聞を売つてゐたアメリカの新聞の厄年だ。

アメリカのやうに森大の頁の新聞を沢山に出してゐては原料のパルプの浪費で、百年、五百年後の製紙が思ひやられる。この方面の何か化學的な發明の起らない限りは――。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(89)―村島「アメリカ紀行」(9)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)へ寄稿の続きです。

### アメリカ紀行(9)

カナダからアメリカに入る

トロント―ニューヨーク―クリブランド

村島帰之

(前承)

### ニューヨーク博物館

午後二時、賀川、小川先生が私の宿へ見えた。

「よい室だナア」

とほめられる。

一緒にタクシーを走らせてニューヨーク博物館へ行く。

「此處は僕のなつかしい故郷だ。苦學時代、此處へ何百辺通ったことか」  
と賀川先生が泌々と述懐される。

入口の所にある隕石は世界一だといふ。大阪城の石程あらう。別にある隕石の横断面の模様を面白く見る。

先生は例によって三百萬年前に棲息したダイノサールなどの研究をされる。私達人間の数十倍の大きな動物が横行してゐた世界を偲ぶ事はむしろナンセンスな気持がする。

アメリカの各都市には、或は大学には、至る所に博物館がある。日本のやうに一部富豪があたら名宝をその倉庫内に死蔵してゐるのは大分趣きが違ふ。アメリカの少年たちは幼時から此處に入りして、活きた教育を受ける事が出来るし、アメリカにゐる外人はこれによって米國化される事が容易に出来るのだ。

アメリカの博物館はこれらの点に貢献してゐる所が甚だ多いと思ふ。

### ヘンリー街の貧民窟

博物館を出たのは既に四時、高架エルに乗って、ヘンリーストリートの貧民窟街へ行く。

掃く事も稀と見えて街路一面の紙屑だ。各アパートの入口や軒先には、日の目を憧れて暗黒の部屋から逃れて来た人々が涼を納れてゐる。ジャッキー・クーガン演ずる所の「キッド」のやうな破れたズボンをはいた少年の幾組かゞ、中央の路面でキャッチボールをやつてゐる。

それを二階や三階の窓から見てゐる印度人やユダヤ人のしなびた顔！

「貸室」の貼札も淋しい。

ヘンリーストリート、セツルメントに立ち寄る。地下室のやうな、暗いじめじめした家だ。此處



に貧困者の家庭で病人の出来た場合、看護婦を送るので有名なセツルメントだが、一日に此處丈けで二十二件から二十五件の派出をしてゐるといふ。

私達の訪れたセツルメントはその本部で、他のスラム地区にはそれぞれ出張所があつて、その地区の必要に對し遅滞なく派出する事になつてゐるのだといふ。看護婦の携帯して行く鞆などを見せて貰ふ。

モウ集會の時刻の六時に近い。急いでそこを出て、サブに乗って、十六哩を急行で走る。十六哩乗っても五仙だ。こユーヨークは安く生活しやうとすれば出来る所だと思ふ。サブは早くてよいが、暑いのは参る。勿論、煽風器は廻つてゐるが、暑い空気の逃げ場所もなく、冷風の入つて来る所もないのだから、唯徒らに熱風をカキ廻してゐるに過ぎない。黒人の沢山に乗つてゐるのが目につく。

### インターナショナルハウス

インターナショナルハウスでは、モウ食事が始つてゐた。食後、賀川先生は英語で、協同組合運動に基礎を置いた國際的經濟的平和を提唱し、日本人の丈の低いのも、若しカナダが現に供超で河へ流してゐる牛乳を、組合を介して安く日本へ輸出してくれたら、モット丈が高くなるだらうと、諧謔して一同の拍手を博した。

八時十五分から公開講演。聴衆は満堂一杯。先生は宗教の特質を分類して話される。

「私は建物の高いニューヨークの文化を尊敬しない、それは人間の墓場にしか過ぎない」といつて機械的文明に陥ちて行く都市文明を痛罵し、神に依る愛の実行を叫ばれた。

九時半、演説を終へたが、握手を求めて来るものが引きもきらない。

十時、軽い飲物を頂いて、十一時、宿に引き取る。

眠いので風呂に這入らず眠る。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(90) — 村島「アメリカ紀行」(10)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

## アメリカ紀行 (10)

### カナダからアメリカに入る

トロント—ニューヨーク—クリブランド

村島帰之

(前承)

三 日

旅に慣れて来たのか、よく眠る。今朝も目を覚ましたのは九時半。気の毒に今井さんはまだ朝飯を食べずに待ってゐてくれた。

十時、一緒に前日と同じカフェーへ行く。

「朝飯ですか」と訊く。

可笑しな事を聞くものだ。きまってゐるぢやないかと思つたが、考へて見るともう十時だ。朝飯には余りにおそいから聞くのだった。

アメリカに来て、食事を摂る事の如何に便利であり、簡単であるかに驚いた。カフェーといつても日本のやうなものではなく、スタンドにかじり付いて高い椅子の上に腰かけて食べればチップも要らぬ、簡便なものだ。カフェーテリアに別に説いたやうな自前サービスで、これ又安値に上る。

更に、禁酒法施行以前に各町角には必ず酒場があつたのだが、法施行後はそれが全部ドラッグストアに変わって、そこでは茶や化粧品を売る以外に、必ずスタンドを設けて、オレンジジュースやアイスクリームなどの清涼飲料を供給してゐる。空気の乾燥してゐるアメリカでは、われ等エトランゼは日に二、三度は必ず此處へ這入って喉を潤さねば堪らないのだ。

私はアメリカへ来て新たに好きになつたのは、カンタローク (圓いメロン) とそしてオレンジジュース (オレンジをそのまま器械で押しつぶしたものだ) だ。

カフェーから帰って、先生に何か予定でもありませんかと思つて、念のためインターナショナルハウスへ電話をかけて貰ふと、賀川先生が出て見えて、別に予定もないとの話。

そこで、午前中は休息といふ事にして、今井さんの研究の概要などを聞かせて貰ふ。

午餐は今井さんが買物に出掛けて、自分でクッキングをして下さる。一緒に宿の台所で食べる。外で食べれば、例へカフェーテリアでも一人前五拾銭内外は取られるのだから最も経済的だ。愉快

な経験だ。

午後、賀川先生は又もや博物館行き。「僕は博物館病にかかってゐるのだ」と電話での話。私は日記が沢山たまつてゐるので、博物館行きを止めて鑑詰る。

### ダウタウン見物

五時過ぎ、今井さんに案内されてダウタウン見物に出掛ける。リバーサイドを二階立てのバスに乗って走る。

今日は二、三日来の涼味（ニューヨークとしては）の後を受けて莫迦に蒸し暑いので、電車も階上が大入りだ。片側の川面を辿って来る風が涼しい。

リバーサイドは、ハドソン河に沿った一帯の名称で、河に沿ってドライブウエーが作られてゐるのだ。そしてそのドライブウエーに面して、アパートメント・オン・パレードだ。

それがいづれも八階から十五、六階位の建物で五室から十室位を貸すのだが、その價は月に二千弗もするのがあるといふ事だ。

かうして高層建築が建つのも、ニューヨークといふ土地が岩石によって成つてゐるからだ。建築の基礎工事には必ずダイナマイトを必要とするといふのも畢竟此のためだ。

聞く所では、ニューヨークには松井といふ優秀な建築技師がゐて、米の技師が匙を投じた建築を、立派に修正して建て上げたとかで、エンパイアー・ステートビルも此の人が関係してゐる事は前に記した通りだ。

アパートらしい建物がまだ続々建ちつつある。概して新しいものは味もソッケもない。唯線と線とを結びつけたといふだけのものが多い。

「ニューヨークは汚くなった」

と先生ら言はれた事が首肯される。

唯芸術味の豊かなのは教会堂と官公街だ。

特に教會堂の美しさは、旅行者の目を聳立たしめるものがある。

百貨店も大きい。メーシー、ワナメーカーなどがそれだ。尤も、アパートメントは、外観は味のない大厦高楼でも、中へ這入ると、宮殿を思はせるやうな立派なものが多いといふ事だ。そこで、斯うしたブルのアパートは、土曜日の夜から月曜へかけては全くの空家だ。いふまでもなく、郊外

の別荘へ出掛けて行くのだ。

アパート生活の悲哀は、別荘にも行けずに年がら年中、日の目も指さぬ一室のみに閉ち籠ってゐる連中のみの味ふ所なのだ。

ブロードウェイに灯が這入り出した。映画館のイルミネーションが盛り場らしい雰囲気をかもし出してゐる。急に階上の人達が下り始める。仰いで見ると、夕立雲が、スカイラインの上を黒々と被ふてゐるのだ。

私達も余りに時間を取り過ぎた気がしたので下りる事とした。地上のアスファルトへ下りると一陣の旋風。思はず眼を瞑って了った。そして急いでタクシーを呼んで、インターナショナルハウスへ走らせる。

「雨が来たら、窓を閉めて下さい」

運轉手が顧みてさういふ。

アメリカのタクシーは、何れもメートルで最初が拾五銭で、四分の一哩毎に五銭を増して行くのだが、そのメートルの標示器に、運轉手の寫真と番号を乗客の方に向けて見せるやうにしてあるのも面白いと思ふ。

勿論、タクシーは、日本のやうに街から街へ流して歩くことを許されない。一定の駐車場にみなければならぬ。われ等の至る所街頭に **No Parking** の文字を見るのは、駐車を許さぬといふのだ。

そして又三仙、五仙でカーの預り所を至る所に見受ける。

雨だ。珍しい夕立だ。

併し、インターナショナルハウス迄一弗二十五仙分丈け走った時には雨は霽であつた。

八時十五分から先生の日本人に対する講演。ニューヨークには千五百（或は三千人ともいふ）在留民がゐるが、今夕集つたのは二百人足らず。

先生は日本の現状を語られる。そして日本の農民が精神的要素を保つてゐる間、特に日本の小學教師が赤化しない限り、日本は決して、左傾しないといはれる。

講演後、ホーリークラブの有力なメンバーである松本さん夫妻や安川さん夫妻とお目に掛る。松本夫人は「車中は暑いでせうから」と、南画を書いた支那風の扇子を下さる。

## クリーブランドへ

十一時の汽車でセントラルステーションを出発。今井さんや紐育教會の x x さん、それから賀川先生の最も忠実な愛読者である堀井さんのお見送りを受けて。

プラットホームへは見送り人を入れない。

荷物が重いので閉口してみたら、小川先生が取ってくれられる。私は日本を出る時から荷物を出来る丈け軽くと心掛けて、両手で優に携えられる程のものを二つ丈け持って来たが、更にニューヨークでその一つ丈けを、此の次にニューヨークに来る日まで、今井さんの室に預けて置く事にした。

が、それでも、何物は重かった。重い荷物を持つ事を堅く禁ぜられてゐる自分に、それが旅行での一番の悩みだった。

賀川先生までが自分手に荷物を持って行かれるのに、まさか私丈けが赤帽を頼むわけにけ行かぬのだから。

それを知った賀川先生や小川先生や今井さんが、私の荷物を持って下さった。私はほんとうに済まぬ事だと思ひ乍ら、つひその言葉に甘えるのである。

私の荷物はまだ多過ぎた。拾銭均一店へ行けば、必で買へる物迄、ゴタゴタと持って来た事を悔いてゐる。今後アメリカへ来る人には、思ひ切つて何も持たずに来る事をすすめ度いと思ふ。

## クリーブランド

私はニューヨークへは、モウ一度引つ返して来る予定なので、ニューヨークの街へは暫くの別れだった。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(91)ー村島「アメリカ紀行」(11)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

## アメリカ紀行 (11)

## カナダからアメリカに入る

トロント—ニューヨーク—クリーブランド

村島帰之

(前承)

四 日

汽車の中の割合には善く眠った。朝九時まで眠ってゐたのだから。

午後一時過ぎ、クリーブランドに着。自動車で直ぐホレンデン・ホテルへ行く。堂々九階建の大ホテルだ。一泊四弗五十仙とはさもありなん。

### ホテルの客となる

アメリカへ来て西洋人のホテルへ泊るのは初めてだ。自動車がホテルの前に着くと、宮内省の守衛のやうな服装をした（モット明るい色彩をしてゐることは勿論だ）男がタキシードのドアをあげてくれる。ボーイが直ぐ持物を中へ運び入れる。

賀川先生の部屋はYMC Aの方で予約してあつたが、私たちがはないので取敢えず、その傍の部屋を取る。大きなダブルベッドが据えられてあつて、バスもついてゐる。ラヂオもある。電話は素より。

ダブルベッドに一人寝るのは勿体ないほどで、おかげで楽々と寝る事が出来る。

部屋は八階だ。エレベーターに乗る毎に、「セブン、プリーズ」といはねばならない。

ホテル住まひとなると、一々ドアのキーもかけて行かにならぬ。勝手に大分違ふ。

食後、少し午睡する。ニューエルさんの息子さんが見えたといつて知らせに來られたので起きる。

夜は八時からYMC A萬國大會の開場式がオーデトルアムのミュージックホテルで催される。ロシア娘たちの合唱の後、××博士が「神と共なる青年の冒険」について語る。

土地の記者が続々来る。むかし、ニューヨークやシカゴ同様、敏活さが乏しい。

「日本の記者のほうが、モット敏捷だ」

といふと、小川先生が、

「そんな事はない。今に御覧」

といはれる。ニューヨークやシカゴの記者に失望してゐるのに、どうして他により以上の記者が見られるといふのだ。

## 私は日本人の中の日本人

小川先生が「アメリカ至上主義」をふりかざされるに對し、私は「アメリカが何だ」と、日本の進んでゐる事を力説して動かない。  
それが事毎にさうなだから面白い。

私はついに日本人の中での日本人だと思ふ。アメリカに對する期待が大きすぎたためか、私はむしろアメリカに幻滅を感じてゐるのは覆ふべからざる事実だ。それは或いは日本が余りにも進んでゐるといふ事になるのかも知れない。

社会事業だってさうだ。小川先生が、  
「こんなのは日本にない」と誇り気に云はれるものも、実はちゃんと日本にあるのだ。  
私は日本のイミテーションの如何に行き亘つてゐるかに驚いた。  
アメリカに對して日本の到底及ばないのは唯「金」だ。若し日本に「金」があつたら、もっと善いものを作つてゐるだらう。

しかし、さうだからといって金のないといふ理由で、日本がアメリカに對して遠く及ばぬのだと速断するのも早計だ。金はなくとも金のないだけに、アメリカでやってゐる事は大概やってゐることは明かな事実だ。

「こんな立派な、金のかかったものはない」といはれたら一言もないが、  
「こんな種類の事業はないだらう」  
といはれたら、大概の場合「ある」と答へ得られるのだ。只それが小規模で、見すばらしいものではあつても……。

日本がアメリカに比し遅れてゐるやうにいふアメリカの讚美者は、実は日本についての認識の足りないことを自ら表白してゐるものではないかと思ふ。

(これは小川先生についていふのではない。小川先生と意見の對立するのは、アメリカについて深き造詣を持つ先生が私に教へてやろうといふ親切心から仰しやうに對し、一方私が比較的日本についての知識を多く持つてゐて、遠慮なくお返事をする結果である。私は此度の旅行で、どれほど小川先生に負ふところが多かつたか、言葉では尽くせない。私は心からの感謝と敬意とを小川先生に對し持つものである)

十一時臥床。前方が電車道になつてゐて、深夜まで喧しいカーの音がするので眠りを妨げられたが、それでも、やがて、眠りに落ちた。

この日、私は新聞で人見絹枝氏の死を知って憂鬱になった。そしてそのことを黒田乙吉氏へ手紙を書く。

## 五日

目を覚ましたら八時半だ。YMC Aの朝飯にモウ間に合はない。隣室の小川先生を訪ふと、六時から起きて賀川先生の今夜の講演のプリントを作っているので未だ朝飯前だといふ。

で、待っていると、一時間経っても二時間経っても小川先生の手があかない。仕方がないので、空腹を忘れるために、手紙を書いて見たが、既に三時間以上が経過し、腹がペコペコなので、一人で階下のドラッグストアへ行ってアイスクリームを食べ一時凌ぎをする。

### 一人買物に

斯う書くと、私が立派にドラッグストアの女賣子と會話をしてゐるやうに取る読者もあらうが、単に「アイスクリーム」をくれといふ事だけでも、一度では通じない。アイスクリームの発音が本当ではないために、少くとも二度は繰り返さねばならないのだ。

アイスクリームはまだいいが、オレンジジュースは、しばしばオレンジェールと間違へられる。発音が何方にでも取れるので、安い方をくれるのだ。日本でならった発音は実際ダメだ。が、併し、そのダメな発音でも繰り返してゐれば、先方で大体察してくれるから通じる。

ついでに一人で買物に出掛ける。近所のメイ・カムパニイといふ百貨店へ行ってワイシャツを買ひ、近所の靴店で靴をも買ふ。靴店では寸法を合さねばならなかつたが、靴屋の先生、なかなかお世辞もので「アメリカが好きか」と仰やる。「好きだとも、日本の次に」と答へると、先生大喜びだ。

不景気で、靴なども正札をなほして賣つてゐる。Price Fall と大書してある。

私の買ったオックスフォードは、七弗と書いた正札を赤字で消して、四弗五十仙と大書してあったのをショーウィンド見付けて、それを買つたのだった。

ブローケンでも立派に通るから面白い。オーデトリウムへ行くと、社交室の一隅に日本人が集つてゐる。賀川先生がそこへ見えて、

「此所は日本人村だねえ」といふ。

(つづく)



## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(92)－村島「アメリカ紀行」(12)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

### アメリカ紀行 (12)

カナダからアメリカに入る

トロントーニューヨークークリブランド

村島帰之

(前承)

#### YMCA 萬國大會

夜は賀川先生の講演だ。講演前に疲れさせてはならぬので、無理に人の来ない所へ拉致する。実際、先生はみんなから引張風になって、そのために疲れられるのだ。講演前にしゃべり疲れて、肝腎の演説の時に声を涸らしてはならぬと思って、先生の意志に反したけれど、無理に検束処分にしたわけだった。

八時集會が始まった。モット博士は立って、「賀川先生が百般の事柄に亘って造詣が深く、最も廣汎な読書家であるのみならず、同時に氏が実践家であるといふ点に對しては、我らに常に氏の前に忸怩たらざるを得ない」と激賞し、約十五分に亘って永々と紹介した。

先生は「生ける神」と題し、神を知る方は、自ら他人の犠牲になることだとて、石井十次氏に絡まる挿話などを語り、我らが他の犠牲となる時、そこに神の存在を知るだらうといひ、日本にキリスト教的精神の這入って来てから、非常なる変革を來した事を述べ、アメリカの離婚率の夥しい増加に對して警告した。非常なるセンセーションだ。

因みに記すが、アメリカと日本の離婚率は戦前、日本はアメリカの三倍あったのが、一九二九年の調べでは結婚百に對し、日本はわづか一〇・七であるのに反し、アメリカは一六・三といふ率を示してゐるのである。

之はアメリカの青年が歐洲戦争に出征して悪い事を覚えて來た結果であるといはれてゐる。それにリノ市のやうに、二週間以上その地に滞在してゐるものに離婚の手続きをして、それで市の財源にするやうな都市が出て來ては、離婚率の高まって行くのも当然である。アメリカの男女問題は

確に乱れてゐる。資本主義の末期の必然的所産なのだらう。

次いで中華民國の Koo 氏の流暢な英語での話があつて十時閉會。例によつて先生は握手攻め、サイン攻めだ。

### 米人の家に泊る

私と小川先生は今日から、ホテルを出て、Mr. and Mrs. Nichols---1311, West 89th, St.のホームを借りる事となつた。家の前後にローンのある型のやうなコテージだ。私たちはその一室のダブルベッドを借りたのだ。

一つベッドに二人寝るといふ事は苦痛だつた。で、私は二時間位は寝つかれずにゐた。涼しい風が窓から忍び寄つて来る。カーの音もこない。私はいつの間にか眠りにおちてゐた。

### 六 日

前夜はやはり寝苦しかった。大きなダブルベッドとはいへ、小川さんの寝返りを打たれるのが一々判るのだから堪らない。

朝七時に起きる。勿論、睡眠不足だ。もっと寝てみたいが、止むを得ない。小川先生はよく寝られたやうだつた。

家の人達と一緒に朝飯を頂く。歩き出したばかりの児が一人、夫婦は目に入れても痛くないらしい。私達が手を出すと、向ふでも手を出してくる。平和なホームだ。前夜、私達が會議から帰つて来た時もコーチで二人つ切りで、ラヂオを聴きながらソファーにもたれてゐる。そして私達を見ると、そこへ迎えて、夫婦でさかんに日本の事を訊いたり、賀川先生の噂を訊いた。

室はパーラーと、食堂と、寢室と、湯殿と台所と丈けらしく、私達に寢室を提供した結果、夫婦はパーラーのソファーで寝たものと想像される。

朝飯はトーストとフライドエッグスと牛乳とだったが、心から歓迎してくれる様子が嬉しかった。ハズバンドはYMC Aの夜學校の機械科の先生だといふ。日本のわれ等のホームに比して、不用品が堆積してゐなくて、簡素でしかも整頓してゐる。

月賦だらうが、家具丈けはブルライクだ。これも月賦で買ったのだらう、フォードで送ってくれる。フォードは至る所で古いのを売つてゐる。Used Car と書いて、まるで我國で古自転車

を売ってゐるのと同じやうに売ってゐるが、下は二十五弗位からあるが二百弗も出せば立派に使用に堪えるのが手に入るらしい。

聞く所ではニューヨーク辺りには太平洋沿岸で中古を買ひ、それで大陸を横断して来て、ニューヨークで売つて了ふのがあるさうだ。さうすると、買った値段の半額で売れるので、結局、高い汽車賃の半額位は節約出来る事になるといふ。

ホーレンデンホテルに賀川先生を訪ふたがゐない。小川さんがオペリンの奮友などに会つて話されるので、私は手持無沙汰になる。それで、小川さんと別れて一人で自由行動をとる。

オーデトリアムの隣が市廳だが、その後方がエリ湖の港になつてゐるので行つて見る。

巨船が棧橋につながつてゐる。私はその船客待合室でエハガキを買つた。スタンプ（切手）は自動式で出て来るやうになつてゐた。何にでも人力を機械に代えやうとするのがアメリカだ。

港に面して大きな野球のスタジアムがある。夜間も開業出来るやうに、電燈装置がデカデカと作られてゐる。至る所の芝生の樹陰にはルンペンが寝転んでゐる。それがみなちがつた人種だ。

クリーブランドの市民の七割が外国人だといったモット博士の言葉が思ひ出される。

私もルンペンの一人の積りで、ポケットに手をつっこんで、アスファルトの道を当てもなしにトボトボと歩いた。

午後は少年審判所のロイスさんの案内で、賀川、小川両先生は大連の勝俣氏と公営社会事業を見に行く。

ロイスは、もとは此の土地の工場に働いてゐた人で労働争議の張本人をやつた事もあるが、その争議をやられた工場の大將の推薦で少年審判所に這入るやうになつたのだといふ。元気な人で、小川さんは「大久保彦左」といふ名を奉つた。

先づ最初は州立の精神病院を見た。三五〇エーカーの廣い土地を擁してゐて、廣々してローンに囲まれて瀟洒な建物が点綴してゐる。ローンの樹蔭には狂大達が圓くなつて団欒してゐる。絵のやうなシーンだ。傍らを通ると女性犯人の中の燥狂性らしいのが大きな声で喚き立てて、一看護人から、ビ・サイレントといつて叱られてゐた。

戸外の廣々とした所で、のんびりとしてゐれば、精神状態も自ら沈静するといふものだ。只狂人に特有の心理の分離で傍らに騒いでゐるものがゐても隣りの者は知らぬ顔の半平でポカンとして

ゐる。

建物の中は清潔と整頓を旨でしてゐて、日本の狂人病院で嗅ぐやうな悪臭一つしない。

ファニチュアもみんな堂々たるもので、ソファーに倚つてゐる連中などは、どこの貴族の家の人かと思ふ程だ。通路の壁にはワシントンその他の画像や風景画を掲げてある。ピアノも置いてあるが、弾いてゐる人の姿は見かけなかった。

狂人達は、何もせずに、只ポカンと日を送るのである。明日も、来月も。来年も。患者の部屋は特等らしいのは上等の آپartment のやうで、白色で塗られた壁にポローつ掛けてはなく、如何なる貴人でも迎えられるやう、患者がらは一週五弗迄は徴するが、二千三百の患者中、これを支払ふ能力のないものが多く、概ねは施療だといふ。治療室の中にも、精神の沈静を圖るため、温浴や掩法を取つてゐる。

ドクトルの話では、四割は癒るといふ。作業治療もやつてゐるが バンクーバー 程大規模ではない。

(つづき)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(93) — 村島「アメリカ紀行」(13)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

### アメリカ紀行 (13)

カナダからアメリカに入る

トロント—ニューヨーク—クリブランド

村島帰之

(前承)

#### 囚人授産場

ついで更に十哩近くカーを飛ばして、囚人の授産場に行く。**Worker's House** と表札が出てゐる。錠の下してある戸を入れて貰ふと、中央には花や木が美しく繁茂してゐる。その片側に、鶯色のジャケットを着た男が二三百人も整列してゐる。

(此所で思ひ出した事は震災当時、アメリカから多数に送って来た服は、その色合から考へて囚人のものだったのかも知れない。併したとへ囚人用のものでも、寒さを凌ぎ得るものならば、有難く頂戴すべき事はいふ迄もない)

何事かと訊くと、食事に行くところだといふ。われ先と争ふのでもなく、徐ろに順の来るのを待つてゐる。これが悉く囚人なのだ。尤も囚人でも、殺人、傷害で強・窃盗などではなく、妻を虚約したとか、酒を密造したとかいふやうな比較的軽罪の人達で、彼等はみな農業に従事して、その代り一ヶ月十五弗の給料が、留守宅の妻の許へ送られるといふ。

食べさせて貰った上、月三十圓が貰へるなら、日本のルンペンたちは皆、入獄を望むだらう。かなれば、監獄の自由束縛は只性欲問題位だらう。

更に驚いた事は、斯うして数百の囚人があるのに、看守は二人しかゐないで、その他の補助看手はすべて囚人自身だといふ事だ。

私たちが食堂へ案内してピフテキの一片を食べさせてくれた男も囚人だった。重いロックの番をしてゐるのも囚人だった。逃亡者は嘗てないといふ。不思議のやうでその実、不思議ではない。

実際、自由を束縛するから、人は余計に自由を望んで逃亡を圖るのだ。

殊に兇暴性や悖徳性の犯罪者でない限り、或る程度の自由は与へた方がいいのだ。

ウォーカーハウスの自治制は、確にわが意を得たものであった。

ロイスさんが一人の囚人に「いつ出るんだい」と訊くと、「来年の今月今日だ」といって皆と一緒にドッと笑った。

これが囚人たちの群とは思へぬ朗らかさだ。

## 養 老 院

ついでに養老院へ行く。建物は古いが割合に整頓してゐる。老人たちはソファーに靠れたり、芝生に憩ふたりしてゐるが、陰惨な気分はない。中に九十四歳の老母がゐて、眼鏡一つかけずに刺繍するのが自慢で、テーブル掛やうの製作品を見せてくれた。

夫婦者の老人を収容してゐる別棟もあった。老いた後、扶養する者がなくて、共に此處に収容されたのだ。院にはチェーカーの土地があつて、老人は耕作に従事してゐるが、中には手工をするものもある。

洪澤氏の寄附の書庫もあった。

一体、この養老院は、日本の養老院に比べて、可働年齢の人が多いやうに思った。

この年齢の人たちなら、日本では、大した収入にはならぬまでも手内職でもして、足らぬころ

は、親戚の人たちに扶助して貰って生活するのだ。

家族制度の國と、個人主義の國の相違だ。

私は小川先生を介して質問して貰った。

それは「相当な家の者で、息子たちが親をその家で扶養するのが煩しく、費用を出して親を養老院に委託してゐるものはないか」といふ事だった。

それに對し、院長の答へは「ない事はないが少数だ」といふ事だった。

これで見れば、さうした者も少しはあるらしい。

アメリカの人間は、少くも老後の生活費だけば貯えて置かねば養老院送りを覚悟せねばならぬ訳だ。

帰り道、サナトリウムの外観だけを見てホテルに帰る。

眠いので、晩の講演も途中で帰る。

今夜からまたホレンデンホテルだ。ダブルベッドに辟易したからだ。此度は八階に移る。一夜三弗半。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(94)－村島「アメリカ紀行」(14)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

### アメリカ紀行 (14)

#### カナダからアメリカに入る

#### トロントーニューヨークークリーブランド

村島帰之

(前承)

プレス社見學

七 日

朝十時、YMCAのトマスさんの案内で、小川先生と一緒にクリーブランドプレスを見に行く。總務のロブさんが編輯室を見せてくれた。人数が少ないのと、姦しい電話が聞えないのと、莫迦に物

静さを覚えさせた。一体に、働いてゐる人も少いらしい。

この新聞はサンデー・ペーパーもない朝刊紙だ。記者志願者の多い事（六人に對し三百人もあった）。此會運動は余り險しくなく書かない事。車中訪問などの習慣のない事などを聞く。大して参考にはならない。二人の寫真を撮ってくれた。

十一時。×××氏の演説を聞く。基督教信者に抽象論のみをしてゐては世の中はよくならぬ。根本の社會組織にまで考へを及ぼさねば——といふ。日本ならわれ等によっていひ尽くされた議論だ。が持手だ。アメリカでも、社會から游離した、單なる個人的の信仰だけでは駄目だといふ事が判つて来たものと見える。明かに基督教社會主義を主張する者に拍手を送るなどは大出来だ。

賀川先生は日本では右翼だが、アメリカへ来れば、左翼だ。面白い事だと思ふ。

### ラヂオ放送

午後二時から賀川先生のラヂオ放送があるので行つて見る。ホテルの十四階にスタジオがあった。窓を開け放つた儘だから、地上の雑音が聞えるが一向平気だ。強い電波が使へるからだらう。アナウンサーは金髪朱唇の婦人と、モウ一人青年。

先生は先夜の説教と同じ「日本の宗教」について話される。日本のやうに、腰かけてやるのではなく、立つたまま、宙吊りのマイクロホンに向つて話すのだ。その前、日本の汽分を作るためとあつて、浄瑠璃の蓄音機レコードを放送したのは苦笑させられた。

ラヂオの聴取料はロハ、放送局は廣告の放送で収益を得るからだ。

午後三時、ソーン、デーラー社へ行く。

工場を見せて貰ふ。余り日本のそれと違はない。活字場のない丈けの差だ。色刷機械が盛に動いてゐるのを見て、一寸羨しく思へた。八時間労働、給料は一日七圓ぐらゐ。

組合に加入してゐるのと最低賃金制の在る關係だ。

新聞記者の一人と話す。社會運動には殆ど関心を持たぬのも弗の國の記者らしくて、明日YMC A反對のコンミニストのデモがあるが、二、三行書く丈だと話してゐた。それにアプトンシンクレアのプラスチックを知らないのには驚いた。ノンキな記者さんではある。

晚餐はロックウエル・アベニューの支那料理を阿部義宗氏から御馳走になる。恰度、そこへ賣笑婦らしい金髪美人が数人這入つて来て、盛に焙草をくゆらがし乍ら甲高い声で話してゐる。ここもまた賣笑婦の稼ぎ場の一つなのだらう。

夜は中國の○○氏と○○氏の講演を聞く。

## 社会事業聯盟を訪ふ

八 日

けふも寝坊をして、私独りでレストランへ行く。そして0000氏の講演を聞いた後、ホテルの前の社会事業聯盟へ行く。クラブ氏からいろんな話を聞く。

共同募金の始まったのはここで、今日では年々五百萬弗も集って、それぞれ各事業団体へ分配してゐるので、そのために特別の調査機関があり、カードの交換所が作られてある。インチキな事業団体などは、分配金を遠慮会積なく創って了はれるのだ。

日本のやうに、赤十字社や済生会のやうな官庁を背景にした社会事業が、民間の浄財を浚って行って、一般に私設事業はそのカスを漁らねばならぬやうな状態なのに比べて、アメリカの共同募金制度を羨ましく思った。若しこれを日本で実施したら、インチキな社会事業団体は淘汰されて行って、本当の事業のみが栄えるだらうと思った。

同じ建物の中に児童局や救療事業の事務所やその購置組合（日本の社会事業もこれに學ぶ必要がある）ビッグシスター、ビッグブラザー、それから一緒にやるのを好まぬ猶太人及びカソリックのための特別の機関などもある。ビッグシスターは現在七十六人の母が不良児の保護をしてくれてゐるといふ。ブラザーの方は少し少なくて五十七人。

そんな話を聞いてゐる内に午後になった。

午後はホテルで日記の整理をしたり、昼寝に過ごす。

賀川先生は支那の博士などと一緒にけふもラヂオを五分間放送された。

前日訪問した新聞社が、私の事を紙面にのせてゐる。プレス紙の如きは写真入りで。

午後七時半から集會が始まる。

(つづく)

## 賀川豊彦の畏友・村島帰之(95) — 村島「アメリカ紀行」(15)

編集

「雲の柱」昭和6年12月号（第10巻第12号）への寄稿の続きです。



# アメリカ紀行 (15)

カナダからアメリカに入る

トロントーニューヨークークリブランド

村島帰之

(前承)

外人教会の日曜説教

九 日

午前十一時から賀川先生の日曜説教が、クリブランドの外人教会で行はれる。十一時すぎ、カーベナー教会の副牧師オベルンハウスさんが迎ひに来てくれたので、両先生と私とが、二人乗の自動車に重なりあって乗る。

オベルンハウスさんはその名の如く二階建のやうなトールマンだ。先生と並んでみると親子のやうだ。

けふは日曜日なので人通りも少ない。店もドラッグストアぐらゐしか開いてはゐない。多くの人たちは、この暑さを避けて湖畔へでも行ってゐるのだらう。街頭では、部厚なサンデーペーパーを売る新聞売子の声のみ、かまびすしい。

教会はグリーンランド大学の隣接地にあった。例によってパイプオルガンが偉大なる竹垣のやうに聳えてゐる。賀川先生はパウロの信仰を脱ぎ、十字架の伴はない信仰は駄目だといって、日本基督教の先進者（澤山保羅、石井十次氏等）の十字架を引例してアメリカに警告を与へた。

デングル家の招待

礼拝がすんでからデングル氏夫妻の昼餐に招かれて行く。折柄雨が降り出して、教会堂前のローンや青葉を濡らし、炎暑離れのした場面を見せてくれた。

デングルさんの令嬢ー□イスクールの生徒ーがさしかけてくれる小さなパラソルに入れて貰ってカーに急ぐ。

雨の中の大學や附属病院などを窓から眺めて、とある丘の上の邸宅へ招ぜられる。

上品なコテージだ。調度も立派だ。

「アメリカの金持は却って質素な家に住むものですよ」と先生の説明だ。

食堂が開れる。マダムがまづ母堂を一番に食堂へ伴って行く。そしてわれ等三人と、オベルハウ  
ス副牧師親子が、主人公の家族と一人置きに並ぶ。

料理の中、何といふのか、大きなビーフを主人が切って皿へ盛って配るのに、第一にマダム、次  
に主賓賀川先生、それから母堂、副牧師の父君といふ順で行ったのも、異郷から来たエトランゼに  
は珍しく見えた。

マダムの流るる如き会話は聞き取るのに骨が折れた。令嬢もしきりに話す。日本なら十三、四歳  
の少女が、これほどに人前で話はしまいと思ふ。

デザートに入った頃、四つ位の男の子が現はれる。可愛い児だ。私は新聞紙でカブトを折ってや  
ると、みんなが可愛い可愛いといって、ローンへつれて行って写真などを撮った。

珍しいお客さんだといふので、方々から続々お客さんが見えて、賀川先生を中心に、支那の話、  
日本の話、カポネの話まで飛出す。

さすがアメリカの女性は社交的で話題豊富だ。夫君は黙してゐても、妻君は萬丈の気焰を吐いて  
ゐる。婦主夫従といふのか。尤も金持の家から嫁いで来た妻君は余計出しゃばるといふが。

二時が過ぎたので立つ。ヂングルさんの一家四人（主人夫妻。お嬢さんに坊ちゃん）が自動車  
でオデトリウムまで送ってくれる。

車中、私は坊ちゃんに私の名刺で小さなカブトを作ってあげる。お嬢さんはそれを見習って一つ  
作り上げた。

「あそこはYWCAよ。日本にもあつて？」

など訊く。ブローケンで答へる。

### Y M C A 大 會 閉 會 式

オデトリウムではいよいよY M C A 國際大會の閉會式だ。モット博士のしっかりした調子の演説  
が聞えてゐる。

私は荷物をまとめるために中坐した。

少し疲れた。ベッドにゴロリと横になってゐると、小川先生が帰って来た。ホテルは六時限りで  
キーを返さぬと翌日分の宿泊料をとられるので一まづ荷物を外へ出す。

六時、YMCAの最後の御馳走を頂きにオデトリウムへ行く。モウ人数は三分の一以下に減ってゐる。

「若い人たちはみんな帰ったですね」  
と給仕人がおおいそをいふ。

大して愛着を覚えぬ筈の國際大會だが、いよいよ閉會となると、矢張り名残り惜しい心なきを得ない。往来で行きあふ、どこの國の代表かしらぬが「グッドバイ」といって過ぎる。

十時、ステーションに向ふ。十二時発の汽車だが、早い目に這入って寢台にもぐり込む。珍しく涼しい。寢心地もよい。

(この号はこれでおわり)